

# 第36回 異名同曲——曲名が変われば 歌の運命も変わる

島倉千代子は『からたち日記』の中で「胸がいっぱいでした」と自分の初恋の思いを台詞にして吐露しますが、人には言えない、まさに「日記」を綴るようにつぶやく「自分への確認」でした。

園まりが『逢いたくて逢いたくて』で台詞のように歌う独白（モノローグ）は、祈りにも近い「あなたへの願望」でした。

『逢いたくて』の7年後の昭和48年、29歳になった園まりの人気はすでにピークを過ぎていましたが、切ない女心を祈りの形で表現するスタイルは変わらず、シングル第43弾『幸せになってね』で「わたし祈ってます」と歌いました。

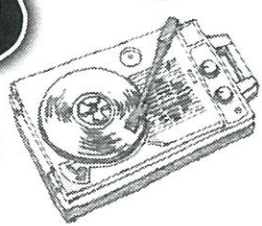
すでに勸のいい歌謡ファンはお気づきでしょうが、『幸せになってね』はもともと松平直樹（元マヒナスターズのボーカル）が率いるブルーロマンの持ち歌で、園まりバージョンの翌年、昭和49年には敏いとうとハッピー&ブルーが再リメイク、曲名を『わたし祈ってます』と一新して

大ヒットにつながりました。両曲は、歌詞もメロディーも同じで題名だけが異なる「異名同曲」と

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いっまぜ

堀井六郎 松本 絵



いうことになりませんが、同様のケースとして有名なのが、『セーラー服と機関銃』（薬師丸ひろ子）と『夢の途中』（来生たかお）でしょう（来生盤のほうが11日早く発売されています）。

郷ひろみの『セクシー・ユー』は南佳孝の『モンロー・ウォーク』をカバーしたのですが、双方を作詞した来生えつ子は『セクシー・ユー』の後半部を郷ひろみに書き改めています。

さらに遡れば、昭和41年11月、青山ミチがリリースした『風吹く丘で』は青山の不祥事により発売直後に出荷停止となりましたが、その1年3か月後、『亜麻色の髪の乙女』と改題された同曲はヴィレッジ・シンガ

ーズによって大ヒット、GSを代表する1曲となりました。

レコード会社に所属しなかった浜口庫之助は、自作曲の提供を一人だけにしなかったため競作となるケースが時折あったのですが、昭和40年に和田弘とマヒナスターズ+田代美代子の歌で大ヒットした『愛して愛して愛しちゃったのよ』も、原曲は昭和38年に小沢桂子が歌った『愛しちゃったのよ』でした。

そのほか発売前に題名が変更されたものとして、吉幾三の『酒よ』は千昌夫が歌う予定だった『手酌酒』、水前寺清子のデビュー曲『涙を抱いた渡り鳥』の原型は畠山みどりが歌う予定だった『袴を履いた渡り鳥』、北島三郎の『風雪ながれ旅』は村田英雄のために用意された『風雪ゴザ枕』など、歌自身のみならず歌手の運命まで変えてしまうケースもありました。

ザ・ピーナッツが昭和38年に発売した『東京たそがれ』は、翌年セルフリメイクされ大ヒットへと至りますが、そのとき一新したタイトルが『ウナ・セラ・ディ東京』でした。題名で禍福が変わるのは、昭和歌謡の日本語には命を運ぶ生命力があったからかもしれません。

ほりい・ろくろう 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和歌謡考」』第1～3集（グスコウ出版）がある